

環境と行動

小野 泰*

Environment and Behavior

Yasushi ONO

ABSTRACT

This report discusses about the relationship between behavior and environment. There are three types of relationship, (1) formes syncretiques, (2) formes amovibles, (3) formes symboliques. Conceptions of space, time and environment are different at each form.

1. はじめに

我々は日常の行動において、さまざまなタイプの行動が見い出される。道路を歩いているとき、急に自動車が現われた場合、反射的に身をさけたり、あるいは足がすくんで動けなかったりする。通いなれた道であれば、我々は別のことを考えながら歩いている、しかるべくいつもの角を曲り目的地に到着する。見知らぬ場所に行くのに地図をたよりに、また道をたずねられれば説明したり、地図を画いてあげる。火事場から逃げてきた人に、どのように逃げたかを聞いても、その人はどうしても思い出せない。同じ場所に行くにしても、そのときの気分により、遠く感じたり近く感じたりする。

かくのごとく、日常生活においても、行動はそのときの状況により、いわば反射的に、自動的に、あるいは象徴的に環境とかかわりあっている。

それにしても環境を通常では、環境を構成する事物、あるいは人間を、それ自体として存在し、ただそれに対して我々のとる態度によりさまざまな行動が取りうるものとして考えている。

空間なるものも、物と物とに囲まれた、また漠然とした拡がりとして、物理的・客観的に存在しているものとしてとらえ、いわく、スペースがないという。

ビルの上階から飛び下りるにしても、一方では死への道をめざし、他方火災状況などでは生への地平として飛び下りる。事実、そのような体験者によると、地上はすぐ近く、跳躍可能に感じられるという。

地平線に出ずる月は、天空にあるときより大きく知覚される。たとえ科学的知識によって、同じ視角において見えるはずだと知っていても。M・ポンティは「客体的世界の手前に、それ自身の規則によって分節される構文法がある」という。このような自然的態度で直接に経験される世界は〈生活世界(Lebenswelt)〉、あるいは〈生きられる世界(le monde vécu)〉と呼ばれる。

一般に科学は、生物を物体化して捉え、法則によって現象を理論的に説明、すなわち〈構築〉する。科学の意味基底としての生活世界の忘却により科学的諸概念が生活世界において有つ意味が見失なわれ、科学と生活が遊離したといわ

* 建築学科

れる。現象学は、客体的世界という先入見を排除し、より根源的な生活世界に立ち還り、そこから逆に客体的世界、科学的世界の生成を解明しようとする。

〈生活世界〉、それが投錨可能性として現象するものであってみれば、有機体の種、特に人間においてはその発達過程において、また状況によって、行動と環境の連関を、その意味において了解することが、建築することをめざす我々にとって、十全な意味での〈生活環境〉の了解への道を開くと考えられる。

2. 行動の意味論的考察

(1) 反射の意味——I. P. パブロフの条件反射学説あるいは、J. B. ワトソンの行動主義は、科学的心理学は、意識の内観を捨て、行動の外観の研究によらねばならぬとする。そして、「有機体のどんな複雑な行動も、要素的な条件反射の単なる合成で構成できる」⁽¹⁾とする。

条件反射は、生得的で刺激—反応の恒常的関係をもつ無条件反射（たとえば、凝視反射、膝蓋反射、唾液反射……など必要に応じて想定するのであるが）⁽²⁾への条件刺激が、偶然的な試行錯誤あるいは提示頻度により、反射生起力をもつようになるという。そして恒常的な刺激—反応の生理的基盤として、刺激の受容から反応を、感覚器官から脊髄への求心性ニューロン、脊髄の中枢ニューロンそして脊髄から筋肉への遠心性の運動ニューロンよりなる神経伝導の〈反射弓〉⁽³⁾で説明する。

K. ゴールドシュタインは、恒常的な反射、たとえば膝蓋反射（四頭股筋の膝蓋筋を叩くと刺激が屈筋の方へ拡がって収縮を起こす、その結果足が上がる反射）は加えられた刺激に対する筋自身の緊張状態の解消だとする。これに対して自然の状態で観察されるのは別の種類の反応であって、足を木の根にぶっつけたときと、山を下りながら足を踏みそこねた場合、足の屈筋は共に弛緩するけれども前者の場合は弛緩をより強めて足を解放し、後者の場合すぐに体の転倒を防止すべく筋を収縮するという。⁽⁴⁾

ここで問題になっている足の筋肉の反射にしても、自然の状況では、刺激の全体状況という

枠の中で、状況によってその反射も異なって現われる。K. ゴールドシュタインはこの反射を〈異質反射 (Fremdreflex)〉⁽⁵⁾といい、恒常的な反射〈固有反射 (Eigenreflex)〉から区別する。

固有反射は、実験室のような、器官が有機体全体から孤立、分離させられ受動的に反応したり、危機状態の場合のような、いわば有機体の過程自体の自己調節として刺激を無害化せんとする平衡化の過程と考えられる。

これに対して異質反射にみられるように、正常な場合の刺激と反応の関連は、刺激と有機体は意味の連関において、K. ゴールドシュタインは「反応は……刺激の有する状況と意味に応じて種々なる形で出現し……」⁽⁶⁾、「刺激作用は刺激の有機体に対する意味によって規定される……」⁽⁷⁾という。

刺激と有機体との関係は、刺激は有機体に刺激応答性（反応）を、有機体は刺激にその刺激作用性を互いに誘発するという相関関係にあり、有機体の状況によっては外的刺激に対する無感覚あるいは、拒否反応が現われる場合がある。

H. フロンは「情動を意味する緊張反応は、運動を準備する姿勢に適合して、ある種の運動の発現を起こしやすく準備し、他の場合には緊張の調節が知覚の装置の中で起こり、ある一つの物にだけ知覚を合わせる活動の極限の状態は、……緊張活動や痙攣にとらわれた個体に必ず起こるところの外的刺激に対する無感覚が生じる。……子供は何か一心に見とれていたり、好奇心につかれているとき、呼ばれたり、強く注意を向け変えようとしてもさっぱり感じないことがある」⁽⁸⁾という。

外界のすべての事象が有機体に、刺激として作用して環境となるのではなくて、有機体の生存、いかえれば刺激によって生じた緊張を有機体の本質に適した方法で平衡へ復帰せしめる場合にのみ、その刺激は環境となりうる。K. ゴールドシュタインは「正常なる過程の目標はそれが全有機体の本質的課題に対して有するところの意味において決定され、目標は……本質的には恒常である」⁽⁹⁾という。

生命活動が、その顕著な特徴である、的確さと融通性を備え、運動が経験によって修正され

るためにも、運動神経支配は各瞬間、各場面において、状況の特殊性を考慮に入れながら調整されており、物をつかむ場合に我々は自分の腕を見る必要はないのであって、腕の位置は各瞬間、その自己受容性によって姿勢全体に関連づけられ、姿勢機能は、その緊張において知覚と運動を同時に調節している。

それゆえ神経系の知覚過程と運動過程は、反射弓の考えのように、それらが関係しあう前からその構造が確定している独立した過程と考えるわけにはいかない。M. ポンティは「神経系の求心領域は、有機体内部の状態と外的動因の影響を同等にあらわす諸力の場と考えるべきで、その諸力は力の分布の或る特権的な仕方にしたがって互いに平衡しようとし、その結果にふさわしい運動を身体の運動部分から獲得してくる。そして運動が遂行されるにつれて、求心系の状態に変容が生じ、今後はそれが新しい運動をひきおこす。」⁽¹⁰⁾という。

有機体は環境と、正常なる過程ではこの力動的で、その有機体固有の、意味によって決定される特権の平衡へとむかう循環過程によってかわりあっている。

条件反射学説や行動主義がよりどころとする、刺激—反応の恒常的關係なるものが、受動的あるいは急激な過度の緊張の有機体自身の自己のみの過程での緊張解消、平衡化であってみれば、それが有機体の原始的意味を示すものであるとか、危機に対する防禦作用として説明することは可能であっても、そのようなものから正常の行動を組立てることはできない。

(2) 行動の学習——行動主義や条件反射学説は無条件反射—それは破局的な反射として本来の反射の意味ではないのであるが一への条件刺激の単なる時間的、空間的隣接の頻度によって条件刺激が無条件反射を引起こすという。偶然的な状況は、同じ場面がもう一度つくり出される理由はなんらないので、日常的なあるいは必然的な共存関係によって、一緒に生じる状況が、条件反射をつくりだす、そのような条件反射により、有機体の行動は自動的に現実の構造に一致すると考える。

H. ワロンは条件反射での連合は受身的な結

びつきではないとして「特殊な刺激の傍に、付随的な刺激を自分で発見する反応なのだ。他方ありとあらゆるさまざまな印象をお互いに弁別する能動的な過程もふくまれている。」⁽¹¹⁾という。「生後15ヵ月から19ヵ月の幼い娘は、風邪を引いたときから、ハンカチをみると、それをつかんで、はなをかむ動作をくりかえす習慣をもちつづけている。」⁽¹²⁾

H. ワロンは、これを事物固有の使用方をじっさいに実現しようとする、事物の機能領域をマスターする傾向として、幼児にとっては客観的に識別するのに先立って、それを識別する方法と考える。

さらに、「26ヵ月になると手にカメラを持ったおばさんと一緒に外出するとき、15日もまえに写真を写した芝生の上に立ちに行く。もしカメラがなければこのようなことはおこなわれない。」⁽¹³⁾という。

ここにおいては行為とその行なわれた状況が結びついている。子供の行為はこのように事物を使用し、また事物の使用されることによって事物に関係をもとうとするばかりでなく、望ましい結果を得るためにその全場面に関係をもとうとする。H. ワロンは「行為のよき適応は、通常、一定の状況にむかっているというよりも、一つの全体にむかっているように見える。とくに、それは内在の意味にもとづいている。この内在の意味は二つの要素をただ近づけることによってあたえられるのではなく、それらの関係を理解することなのである」⁽¹⁴⁾つまり刺激相互の空間的、時間的、いわば物理的あるいは事実的な、隣接関係を有機体にとっての意味の関係としてとらえることにより、刺激を次にくる場面の記号(signal)あるいは徴候(symptom)として有機体はその刺激に対しては反応し、その場面の実現へ向って行動する。M. ポンティは、「条件興奮と条件反応の關係は、それゆえ〈諸關係の關係〉であり、信号は、一つのゲシュタルトなのである(sign-gestalt)」⁽¹⁵⁾という。

E. フッサーが存在領域を〈物質〉、〈生命〉〈精神〉とし、その存在を問うのに対して、M. ポンティはそれらを、意味の秩序、形態(Gestalt)の違いとしてとらえる。

恒常仮説のよりどころとする刺激と反応の1対1の関係は、上述のように器官が有機体全体から孤立させられ外的刺激による緊張を平衡せしめる反応であり〈物質〉の領域における〈物理的形態〉の特質である。物理的形態は、「或る与えられた外的条件に対して得られる平衡」⁽¹⁶⁾であり、電流の場合に電極の分極作用によって定常状態、平衡を得るように、「つねに緊張状態を減じて、系を静止に至らせる」⁽¹⁷⁾ような平衡である。それに対して〈生命〉・〈精神〉における〈有機的形態〉では現在の〈現実的条件〉ばかりでなく、たとえば徴候によるような、〈潜在的條件〉に対しても平衡が得られ、その平衡も物理的形態における物理的な既存の秩序へむかう平衡ではなく、有機体の意味にとって最適な、特権的な平衡である。有機体は「自己本来の限界を超えて活動し、自己の環境を自分で作りあげる」⁽¹⁸⁾のであって物理的形態には還元できない構造をもっている。

3. 行動と環境

(1) 行動の構造——有機体は自己の環境を自分で作りあげるものであって、どの有機体にも普遍的に妥当するような環境は存在せず、種個有の知覚能力、運動能力といった作能によってその環境は異なる。J. F. ユスキュルスは、それぞれの有機体は、その種のもつ知覚器官および作用器官をもち、その種固有の知覚標識ならびに作用標識との機能環(Funktions Kreis)よりなる環境世界(Umwelt)をもつという。ダニにとっては動物の出す酪酸という知覚標識だけの環境世界であるように、有機体の環境世界は、人間にとっての客観的世界として考えられうる環境(Umgebung)の一片に過ぎない⁽¹⁹⁾という。

さらに有機体と環境の関係は、その誕生・発達の仕方その種によって異なる。A. ポルトマンは哺乳動物群の神経組織体制と発生・発達のしかたには一定の関係があり、たとえばウサギのように、その誕生においては、未熟で自力で生存できない〈巣に坐っているもの(Nesthocker)〉と、ニワトリのように親と同じような行動が可能なく巣立つもの(Nestfluchter)〉に区別し、人間の特徴は胎内で一次的に巣立つこと

が可能となる時期を越えて、脳髓の高度な発達が可能となるべくその期間を延長し、誕生時の未熟性は、〈依存的に巣立つもの〉あるいは、〈2次的に巣に坐っているもの〉とする⁽²⁰⁾。人間は、ほかの哺乳類の巣立つことを可能ならしめる本能的な行動様式がわずかしか発達しておらず、誕生後に環境の影響のもとに、外界と交渉する知覚器官、作用器官の間の神経組織の結合がみられる。この環境の影響のもとに自己の作能の発達が可能となることによって人間の行動の特異性は、A. ポルトマンによれば、動物の本能的な行動が〈環境に制約(umweltgebunden)〉されているのに対して、人間の行動は〈世界に開かれ(welt offen)〉ているという⁽²¹⁾。まさに幼児にとっての環境はその作能の発達と相関的に、その世界を拡げていく。H. ワロンによると、ある時期の知覚と運動は正確に対応しており、幼児が口と唇の協応しかできない間は、口に含まれ探られたりしうる空間〈口腔的空間〉が幼児にとって可能な世界であり、体位の平衡を保つことが可能となって、はじめて手と腕の協同が可能となり〈手近かの空間〉が可能となるという⁽²²⁾。

行動と環境の関係は有機体の種によって、また人間は発達段階、また状況で異なる。

M. ポンティは、(1)場と愈合した行動(愈合的形態(fomes syncrétiques))、(2)場と愈合しながらも場を相対的に対自化する行動〈可換的形態(formes amovibles)〉(3)現実の場のみならず、シンボルによって方向づけが可能な〈象徴的形態(formes symboliques)〉の層構造としてとらえる⁽²³⁾。これらの層構造は人間が、幼児からの発達過程がたどる道筋であり、その各層は互いに〈基づけ(Fundierung)〉の関係にある。時間、空間、自己と他人の関係、意識、あるいは現象する物の意味はそれぞれの層においてそのあり方を異にする。

(2) 情動と愈合的行動——誕生間もない幼児の行動は、H. ワロンによれば2つの顕著な特徴を示し「外界と交渉することが不可能なことで自分の欲求を満たすのに大人の助けを必要とすることであり、他方情動反応・表現が成熟していて、それがすべての衝動にともなっていることであり、この情動反応が実行力のない点を

補っている」⁽²⁴⁾考える。

情動は交渉活動やその中枢に発するのではなく、内蔵の働きを含めて、身体の緊張、姿勢の活動に基づく。⁽²⁵⁾このことは情動の性質をもったくすぐりは、自分でやってみるわけにはいかず、自己の交渉的活動に拮抗して、その場所も足の裏とか、わきの下とか関節や体節の要するに身体の姿勢、平衡を保つ感覚に由来する。情動が外界と交渉する外受容的感覚 (extriocéptif) ではなく、自分自身にとじ込める自己受容的 (proprio-céptif) な感覚や、内受容的 (interiocéptif) な感覚であり、情動が支配している間での情動の表出と対応する外的状況の接触は、通常の場合とはまったく別のものになる。H. ワロンによると「自我と非自我の境界が消えてしまい、感覚が混沌として未分化になり、しかしまだ外界の影響が入り得る状態において、外界の感覚は今やっていることの全体に溶け込んでしまう」⁽²⁶⁾という。部分がはっきりと分かれていない状態を混沌的あるいは愈合的 (synchrétique) といい、主体と対象、対象相互、対象の意味と主体の感情などの関係を解き難く愈合させてしまう。情動の場面では、偶然的に居合わせた状況が主体になって意味的に結びつく。「幼児がうれしくてあばれているとき、ゆりかごと一緒に頭の上のおもちゃもゆれたりすると、こんどはゆれているものを見ると筋肉の躍動もうながされ、それが喜びの表現となり、また喜びをそだてている」⁽²⁷⁾まさに幼児にとっての環境は、情動を介して愈合することにより、情動的・情緒的な意味連関において存立し、また未知の、偶然的状況もその環境の内にとり込まれて、その環境を拡げていくことが可能となる。

幼児の他人を必要する行動において、また精神的発達にとって重要なことは、姿勢機能 (fonction posturale) が、情動を介して他人との交流を可能ならしめることである。幼児はきわめて早期に他人の表情に反応する、ギョームによれば「生後わずか1, 2週間目の幼児に、いろいろな表情やちょっとした笑いに驚ろいたような用心するようなそぶりがみられ、しばらくして、ほほえみに対して自らがほほえむ」という。

幼児は他人の身体動作を目撃してそれを記号

として、その意味を解釈するのであろうか。

H. ワロンによれば、姿勢緊張における筋肉の収縮 (その表現が表情・身振である) と感覚 (自己の心的状態の感覚) は相互依存的関係にあり、それらは通常の刺激と反射との間のような間隔がなく、互いに密接に関連し、同時に互いにその特性を規定し合っているという。⁽²⁸⁾姿勢や表情活動と感覚の絶えざる相互作用により、自己の気分特有な多様な表情と、それを感じる微妙な直観をときすましていく。この心の状態 (気分) と、身体面での動き (表情身振り) が同時に調整されるという。

この相互作用は二重の作用をもち、H. ワロンによれば「表情そのものは、意識の対象となって、他人の表情を目前にしたとき、自分がその表情をしたときとおなじ仕方でせまってくるようになり、他方、表情についての意識は、表情をしている当人のものでありながら、見ている他人の意識と同一視される」⁽²⁹⁾という。

幼児が自分自身と他人との区別を知らない状態において、他人と愈合することにより、自己の心的状態を感じ、それは表情となって表現される。まさに幼児においては、他人のほほえみが自己のほほえみとして、他人の志向が私の身体を通して働き、私の志向が他人の身体を通して活動するといった「前行通 (précommunication)」⁽³⁰⁾の状態にある。姿勢機能は情動を介して、他との愈合と自己の直観という関係において、象徴的意識としての本来の人間の意識と、自己と区別された他人経験を、対として、可能ならしめる精神発達の基盤となる。

(3) 可換的形態と象徴的形態——愈合的形態では、自己と物や状況は、未分化に、愈合したものであったが、さらに、物や状況と一種の力動的体制をつくり、その体制の移調により、それらを相対的關係においてとらえる可換的形態と、自己とは無関係なものとして、物や状況をそれ自身で存在するものとする。言語の使用によって特徴づけられる象徴形態が区別される。この可換的形態と象徴的形態は、H. ワロンが、本能的あるいは習慣的行動と区別した、感覚運動面で働く〈場面の知能〉と表象および象徴面で働く〈推論的知能〉に相当する。⁽³¹⁾

H. ワロンによれば〈場面の知能〉は、物や状況と主体と間の力動的体制化により、知覚の場が主体の欲望とか態度とか、その態度から生じる運動と一体になり、しかも知覚の場それ自体も、そのときそのときの必要性、運動の可能性あるいは欲求の方向に応じて変わりうるといふ。この力動的体制も前述の姿勢機能に基づいている。姿勢機能における筋肉の緊張性収縮は、実行されている運動の支えではなく、むしろ運動の連続を準備し、運動を〈可能態〉⁽³²⁾にしておくといふ。スタート前の走者の不動性は、バネのごとく堅く緊張した筋肉収縮のうちに、次の動作が可能性として存在しており、このような運動のための調節に知覚器官の調節が直接に結びつき、姿勢機能は感覚と運動の二つの極を愈合させ、期待するおなじ方向づけを与える。V. ケーラーの有名なチンパンジーの実験において、高い所に吊されたバナナを取るのに、木の枝を棒として使用できるのは、それを表象することによってではないことは、木の枝が欲望の対象であるバナナと同一視野に入ってはじめて力動的体制のもとで棒として機能し、同一視野に入っていないと利用出来ないということが示している。

チンパンジーにとって自分が寄りかかっている台としての箱は、踏み台という道具としての箱ではない、それらは二つの違った二者択一的な対象であって、同一事物の二面ではない。まさに対象は場の力動的体制に依存する〈ベクトル〉をまとい、そのような〈機能値〉⁽³³⁾を与えられて現われる。

H. ウェルナーは、発達した人間の象徴的行動に対して、子供・動物・未開民族の知覚の体制では、対象は主体の運動—情動的状況全体によって型どられ、対象は行動にとって存在する〈行動物(thing of action)〉あるいは〈シグナル物(thing of signal)〉として、⁽³⁴⁾主体と区別されて意味の一定した物としては存在しないといふ。対象はそのシグナル特性によって我々の行動を誘う、J. F. ユクスキユルは対象は〈行為のトーン(Leistungston)〉または〈作用のトーン(Wirkton)〉たとえば椅子は〈座るトーン(Sitton)〉をもって現われるといふ。⁽³⁵⁾

また幼児の空間は、H. ウェルナーによれば、

行動を通して定位され、その次元を得る〈行動の空間(space of action)〉⁽³⁶⁾であるという。「3才の子供が動物園で熊の檻に通じる左右2つの階段を、一方を昇って、他方を降りて帰った。後日、前に降りた階段を昇ろうとしたところ、子供は「こっちはいけない階段、こっちは降りる方で……むこうが昇る階段……」⁽³⁷⁾という。

可換的形態では、物は行動にとって相対的に機能的意味をもって現われ、物が自己にとって独立したものとして、それを多様な観点、パースペクティブにおいて見ることができず、空間も自己の行動に関係づけられ、非可逆的で、座標変換が可能となるような空間なのではない。

観点を選んだり変えたりする能力が、現実的な環境の向う側に、各自が多く局面から見ることのできる一つの〈物の世界〉⁽³⁸⁾を認め、そして無限な空間を有することを可能ならしめる。限られた現実的環境だけではなく、言語による想像上のもの、可能的なもの、間接的なものに対しても向きを定めることは、象徴的形態において可能となる。

(4) 物と空間——愈合的形態においては、物とはただ未分化な人間的意味の情緒的接触であり、可換的形態では、相対的に対自化された、行動にとっての機能値をもってあらわれるものであった。

物が真にそれ自体として存在するという客体性をもつためには、「それが私に与えられていると同時に、他者にも与えられているということ」を、私が知っていなければならない、つまり他者の関係はこの〈物〉の構成と同時であるとM. ポンティは考える。

我々の視野においては、物をその一つの側面(Aspect)においてしか見ることができず、必ず見えない側面がある。

物はその一面性において与えられる、これを〈射映(Abschattung)〉⁽³⁹⁾といひ、知覚においては物が射映において現われることを本質とする。私と他人は同一の対象を見ながら、同じ物を見、そして感じていることを疑わない、しかしながらそれらの側面は同じではない。

たとえば木の立方体を、その側面が全部見えるとすると、それは透明でなければならず、木

の立方体であることを止めてしまう。等しい6つの面からできていると考えることによって同一の対象である、とすることができるのは、幾可学的概念としての立方体である。M. ポンティは「もし立方体の全側面が一目で認識されたとすれば、私はもはや、私の視察に徐々に提供されるような〈物〉にかかわっているのではなく、私の精神が完全に所有する〈観念〉にかかわっていることになろう。そのようなことは、私が実際に知覚しないで、単に〈存在しているように思う〉ような対象を思い浮かべるときに起こることなのである。」⁽³⁹⁾

対象が同一の〈物〉として存在しているということは、「その対象が〈感じられているもの〉、という独特な印象を与えるとき、つまり対象がそうした直接的な仕方で私を促えるとき」⁽⁴⁰⁾である。つまり知覚経験において、その同一性の洞察が可能とならなければならない。

〈われ思う〉といった顕在的な意識活用、定立的な〈作用志向性(Akt-Intentionalität)〉の、〈……は……である〉という判断によって述語づけられる作用に先立って、すでに世界は漠然としながらも統一をもったものとして与えられる。この前述定的統一を可能ならしめるのが〈作動しつつある志向性(die fungierende Intentionalität)〉であり、この世界が〈生活世界〉あるいは〈生きられる世界〉である。そのような世界を知覚する主体は、M. ポンティによると、客体的な身体から区別される〈現象的な身体〉であり、この身体によって〈世界に住みつく〉という。

このような前人称的な身体的実存の運動的、知覚的生の層において初次的な意味の発生がみられ、顕在的な意識作用による能動的な意味付与の働きは、その初次的意味の採り上げなおしであり、いわば二次的、派生的なものであり、初次的な意味がそれを保障しているのである。

対象が私と他人に、それぞれ見られ、感じられているという知覚の〈パースペクティブ性〉によらなければ、すなわち私と他人は別々のパースペクティブで同一事物の、それぞれの射映には隠れている側面を知覚していることを、他人は、私のいる〈ここ〉に対して〈あそこ〉で、

私に見えているような視覚的身体をもち、私とは別の心的作用で生気づけられながら見ている、ことを知っていることが前提となる。

他人が自己と愈合したものとしてではなく、まさに自己とは別の他人として、認識することが可能となつてはじめて、物がその同一性をもった〈物〉として現われる。

このことは、私は〈今—ここ〉に居ながら、同時に〈あそこ〉に居る彼の位置に立ち、自分の射映には隠れている側面の、彼の位置からの射映が可能となる能力に依拠してのことである。

E. フッサールは、あくまでも現出する外的な物にかかわって、それに運動しながら、その運動を客観化することができる感覚能力、運動の中で空間を構成していく能力を〈運動感覚(Kineästhesis)〉⁽⁴¹⁾と呼ぶ。すべての空間は、運動の中で、客観自体と自我の運動の中で、しかもこの運動によって与えられる方向づけの変更を併いながら、構成され、与えられる。

つまり空間は、私の身体が知覚している〈ここ〉を定位の特権的中心として、前後、上下、左右に方位づけられると同時に、自分自身を視野の中でさまざまな任意の位置に置き、そこを〈定位の中心〉とする方向づけが可能で、無限の変換可能な空間となる。そして物が、行為にわたって、機能値から解放され、多様な観点から同一の〈物〉として、象徴的行動が可能となる。

象徴的形態での行動は、〈記号間の関係〉がその〈意味の関係〉として、言語の使用によって特徴づけられる。可換的形態においては、幼児による環境の表象が、具体的に行動した順序においてだけ可能であったが、象徴的形態では地図の利用が可能となる。

地図は、M. ポンティによれば「道程を〈公平な鳥瞰図〉として、自分が辿った観点とは全く違った観点からの表象を要求する」⁽⁴²⁾という。道を歩む自己を、運動体の位置に置きそれらの関係を可能ならしめる、より自由な空間が必要とされ、道の角あるいは坂などの視覚的記号の関係を、角を曲がり坂を登るといった運動の意味とすることが可能とならねばならない。M. ポンティは「運動的メロディを視覚的図表に置きかえて、両者のあいだに相互対応や交互表出の

関係を設定する」⁽⁴³⁾ ことができなければならぬといふ。

現実の環境に、表象による環境を重ね合わせることができる自由なる空間が、象徴的行動を可能にする。

4. おわりに

環境を客体的にそれ自体として存在するものとして、空間をユークリッド的な空間として扱うことがたとえ可能であるにしても、それは行動可能性、投錨可能性の世界、〈生活世界〉あるいは〈生きられる世界〉を基盤にしてのことであって、行動の形態それぞれの世界があり、それらの世界と行動を理解することが、トータルな意味での〈生活環境〉の了解へと道を開くものと思われる。

【 参 考 文 献 】

- (1) ジョン・B. ワトソン 「行動主義の心理学」
河出書房新社 (P255)
 - (2) 同書 (P43) (3) 同書 (P113)
 - (4) K. ゴールドシュタイン 「生体の機能」
みすず書房 (P87)
 - (5) 同書 (P89) (6) 同書 (P87)
 - (7) 同書 (P107)
 - (8) H. ワロン 「児童における性格の起源」
明治図書 (P83)
 - (9) K. ゴールドシュタイン 「生体の機能」(P63)
 - (10) メルロ・ポンティ 「行動の構造」みすず書房(P80)
 - (11) アンリ・ワロン 「認識過程の心理学」
大月書店 (P62)
 - (12) 同書 (P65) (13) 同書 (P66)
 - (14) 同書 (P66)
 - (15) メルロ・ポンティ 「行動の構造」(P164)
 - (16) 同書 (P217) (17) 同書 (P217)
 - (18) 同書 (P217)
 - (19) J. F. ユクスキェル 「生物から見た世界」
思索社 (P26~27)
 - (20) アドルフ・ポルトマン 「人間はどこまで動物か」岩波新書 (P26~72)
 - (21) 同書 (P91)
 - (22) アンリ・ワロン 「児童における性格の起源」(P34)
 - (23) メルロ・ポンティ 「行動の構造」(P161)
 - (24) アンリ・ワロン 「児童における性格の起源」
(P126)
 - (25) 同書 (P66) (26) 同書 (P84)
 - (27) 同書 (P87) (28) 同書 (P90)
 - (29) 同書 (P90)
 - (30) メルロ・ポンティ 「眼と精神」みすず書房(P137)
 - (31) アンリ・ワロン 「認識過程の心理学」(P274)
 - (32) 同書 (P170)
 - (33) メルロ・ポンティ 「行動の構造」(P177)
 - (34) H. ウェルナー 「発達心理学入門」
ミネルヴァ書房 (P59~60)
 - (35) J. F. ユクスキェル 「生物から見た世界」
(P82~83)
 - (36) H. ウェルナー 「発達心理学入門」(P174)
 - (37) 同書 (P173)
 - (38) メルロ・ポンティ 「行動の構造」(P261)
 - (39) 同書 (P316) (40) 同書 (P315)
 - (41) 木田元・滝浦静雄・立松弘彦・新田義弘
「講座・現象学2」(P158)
 - (42) メルロ・ポンティ 「行動の構造」(P178)
 - (43) 同書 (P178)
-